

【短編】天才女騎士は戦友を女体化させて性の悦びを教える。

突然、乳首に甘い刺激が走る。身体中に電流が走ったような感触に包まれる。

「んああああ!？」

当然、僕の身体は激しく跳ねる。そう、今の刺激は乳首を甘噛みされたことによるものだ。

そこで気付いたのだが、どうやら僕は一糸まとわぬ姿で柱に縛られているようだった。それに、先ほど自分の出した声が高くなっており、胸も膨らんでいるように見える。

おそらく、自分は女にされているようだが、いったい何故こんなことになっているのだろう。

「気が付いたみたいだね？」

目の前にいる天才女騎士、レナが勝ち誇ったような声で僕に話しかける。

そうか、自分はこの人との戦いに負けたからこうなっているのか…。

戦いを挑んだ時とは異なり、黒いネグリジェを身にまとっている。戦っていた際も美しかったが、今のこの姿もとても気品が高く美しいと思う。

説明しよう。

僕とはあるさすらいの剣士…とでも言っておく。武術の腕前には我ながら自信がある方で、この街で暮らすレナという女騎士と一度勝負をしてみたいと思っていたのだ。

もちろん、彼女のことが憎かったというわけではなく、その強さ・美しさ・心優しさに敬意を払っており、戦えることそのものを誇りに思っていた。

「レナさん…突然ですが、僕と勝負してください！」

「んー? いいけど… 負けた方は勝った側の言うことを一つ聞く、それが条件ね？」

レナは条件を出すものの、勝負には快諾してくれた。

彼女の武術は思った通り素晴らしく、剣術はもちろんのこと魔術にも長けていた。

僕も充分健闘できたとは自負しているが…魔術の面であと一步及ばなかったのである。

攻撃を避けるための激しい動きで疲労が重なっていたところに眠らせる技を打たれ、避けられずもろに食らってしまったのだ。

それで、目が覚めたらこの状況、というわけである。

「負けたことは素直に認めます。しかし、どうして柱に縛り付けた上、女の子の姿にしたのですか？レナさん、あなたの頼みは一体何なのでしょう？」

慣れない女の子の高い声に戸惑いながらも、僕はレナに質問する。

まさか、街の脅威と見なされて「処分」されてしまうのだろうか。

「一言で言えば「帰る前に、女の子の味を知ってほしい」って感じかな？」

レナは意味不明なことを口走る。

女の子の...味...？

「今、きみには一時的に女の子になる薬を飲ませてあるの。

もちろん、その間は身体の神経や感覚も女の子のそれと一緒にだよ」

レナは続ける。

つまり今、この身体の下にはいつもの棒はなく、代わりにもう一つの穴があるというわけか。

確かに、ここで目を覚ました時から何か違和感を感じていたがこういうことだったのか。

「さっきの戦いでわたしが勝った報酬として、これからきみを女の子と同じように可愛がらせてもらいます。痛くはないから安心してね？」

「異論はありません...お手柔らかに」

僕は素直に受け入れる。負けた人物に対しても敬意を持って接するレナはやはり美しい。

しかし、彼女の顔には少し微笑みのようなものが見えた。もしかしたら、彼女はこういうことをするのが趣味、いわば性癖なのかもしれない。

レナが僕のもとに近づいてくる。すると、両手を柱の上に縛られているせいで無防備になっている脇を突然つつんと指でつついてきた。

「はうっ」

人間の弱点の一つである脇を触られたことで、少し変な声を出してしまう。

「んー...ふむふむ...」

レナは顔を近づけたかと思うと、今度は脇の匂いをくんと嗅いできた。

やめろ。脇は食べ物ではない。

とはいえ、勝負に負けた身で反抗するわけにもいかないためあえて無言を貫く。
すると、今度は匂いを嗅いできた脇を突然舌で舐めてきたのだ。

「ひゃあああ！！？」

突然舐められた衝撃は大きく、ものすごく裏返った声を出してしまった。
舐められた場所が部屋の空気で少しひんやりする。

「んー。じゃあ、次は王道のくすぐりかな？」

レナは僕の両脇に指を当てて、そのままちよちよちよちよちよちよ……

「あひっ、ひっ、ひゃああああっ、あはははっひゃひゃ！！」

くすぐられた際の笑いで息ができない。苦しい。

だが、幸いすぐにくすぐり責めは止まった。…と思ったが、レナは次の手を用意していたのだ。

「えいっ」レナは不意打ちだと言わんばかりに、僕の脇腹を掴まってきたのだ。

「ひゃあああっ！！」予想だにしない場所への刺激にびっくりしたのはもちろん、腰もがくがくと跳ねてしまう。

「脇で遊ぶのはこれくらいにしてあげるね、でもまだ遊びは終わらないからね」

レナはまだまだ遊び足りないようだ。この先、一体どんな責めを与えようとしているのだろうか…。

「その前に…ちょっと下準備をさせてね？」

レナは何やら、近くの棚から瓶に入った液体を取り出したかと思うと、その液体を筆で塗りつけてきたのだ。それも、下半身にある2箇所の穴に。

「んんっ、つめたい…！」僕は思わず声が出てしまう。

「ふっふっふ…この薬は冷たいだけじゃないよ…？まあ後でのおたのしみね♪」

でも、この冷たさは嫌いではないかもしれない。塗る場所の趣味は悪いと思うが…。

レナはにやにやしながら僕を見つめると、今度は女体化薬で大きくなっている僕の胸に目を向ける。

胸…おそらく乳首が目的だろう。

最初あの甘噛みでも身体中が激しく跳ねたのに、あれをまだやるというのか。

責めへの不安と期待が混ざり中、レナは早速いただきますと言わんばかりに僕の乳首に向かって吸いついてくる。

「ひっ、やああああ！！ああん！！」

じゅるるるう、ちゅううー、ちゅっ、じゅるー。

露骨に大きい音を立てて吸われていく僕の胸。

「うあああっ、いやっ、なにこれえええ！！」

レナは乳首に吸いついてきただけでなく、乳首を舌でこねくり回してきたのである。

舌をくるくる回したかと思えば、今度は縦にぺちぺち、横にぺちぺち...

次はどんな責めをされるのか。これだけでも気がおかしくなる。

【サンプルはここまでとなります。】